

七 江馬氏拠点の景観復原

— 下館・東町城・山寺跡を中心に —

大下 永

一 はじめに

本稿では江馬氏の拠点地域周辺を歴史地理的な視点から考察する。江馬氏の拠点は、下館・高原諏訪城を中心として、それらを取り囲むように下高原郷内に配置された山城群が一体となり、「群」として機能していた中世城館の形態をよく示す」という特徴がある。また、拠点地域内には河川・街道・集落・寺社といった様々な要素を内包する。江馬氏の拠点地域全体のあり方を理解するためには、各地域の武家拠点を中心とする狭い範囲だけではなく、集落全体や河川・街道の結節点、地域を区切る山地や段丘崖等の自然地形を含む広域の範囲内の構成要素を把握してその相互関係を検証し、動態的に推測する必要がある。しかし、これらの拠点の変遷過程や地域全体のあり方については、これまであまり着目されてこなかった。

江馬氏の拠点地域については、大平愛子が史料・聞き取り調査によつて字名・寺社・街道の配置等から近世殿村の景観復原を試み、中世に遡つて下館周辺の村落の範囲を想定している（大平愛子一九九七）。一方、小島道裕は古絵図や地籍図（明治前半期に地租賦課の目的で作成された地図）を用いて下館・東町城周辺の空間構造を検討している。（小島道裕一九九五）。また、近年の研究によつて、下館・高原諏訪城の付近には中世山寺の存在が明らかとなっている

（三好清超二〇一六・大下永二〇二〇a）。さらに、筆者は地籍図を主な資料として、下館・東町城等の江馬氏拠点を含めた飛驒の武家拠点の空間構造の検討を行っている（大下永二〇二一a・b・d・f）。本稿では、これらの成果をふまえて江馬氏の本拠である下館・高原諏訪城周辺や関連する山寺跡（殿坂口遺跡）、さらに東町城周辺を中心として各拠点全体の景観復原を行つて空間構造を把握する。さらに、それらを連関して考察することで、中世から近世に至る江馬氏拠点地域の変遷過程を広域的に検討したい。

二 主な検討手法（明治前期の地籍図について）

本稿では、江馬氏拠点地域の景観復原を試みる。そのための資料として、明治期に作成された地籍図を主に用いる。地籍図は明治五年（一八七二）の地券発行決定から、土地台帳制に移行する明治二年（一八八九）頃までに作成された地図が主に研究に用いられる。図には土地の形状や配置・地目・道や水路の配置・寺社の配置等、近世から近代に移行して間もない時点の土地の詳細な様相が記され、これらの情報を分析することでさらに古い段階に遡つて景観復原を行うことが可能となる。

飛驒市は二〇〇四年の合併前の旧町村単位で明治二十一年（一八八八）頃作成の地籍図を行政資料として保管し、旧神岡町分についても大字ごとにとめて保管している。これらは明治一八年（一八八五）以降に岐阜県下で実施された土地台帳制移行に伴う地押調査・地籍編纂事業によつて地籍帳とともに作成された地図であることが判明している（大下永二〇二一b）。これらの図は作成段階で様々な種類の図が存在するが、今回の検討で主に使用するのは「字絵図」

と呼ばれる小字毎に一枚の紙（対象となる字の広さによっては続紙）に描かれた図である。字絵図には大字境・小字境・道・水路の他に土地境界や地番・地目が記されている。また、一筆の地目毎に色分けされている。一般的に道は赤色、河川・水路は水色、宅地は桃色、原野・芝地・山林を薄緑色、寺社地・墓地を茶色で部分的に彩色し、田畑は彩色していない。字絵図も複数作成されている場合が多いが、可能な限り古い段階（後の訂正が少ない）図を利用する。一枚のみでは理解しづらいが、複数の地区の地籍図を集合して大縮尺の合成図を作成すると、古い段階の地域の様相が理解できる。

この地籍図を集合させた図を基本として、範囲内に含まれる地形・地割・街区・街路・街道・河川・宅地・用水等の構成要素に着目しつつ、近世段階の村落の様子が分かる史料や、近年の分布調査や発掘調査による分析を加えて景観復原図を作成した。なお、殿坂口遺跡については、地籍図に加えて遺構配置図を作成して分析を行っているため（大下永二〇二〇a）、本稿ではその内容も紹介する。

三 下館・高原諏訪城周辺の空間構造（図1）

（一）遺跡の立地と街道のあり方

下館は高原川の右岸河岸段丘上に位置し、高原諏訪城はその東背後の山上に位置する。下館は高原川から約五〇〇mの距離があり、高低差も大きい。館西側の段丘崖中に越中街道と信州街道を繋ぐ脇街道の上宝道が通っている。上宝道は、集落南東部で越中有峰に通ずる山之村道と合流する。さらに、山之村道に沿って高原川支流の和佐保川が流れている。

（二）下館の配置と構造

下館の中枢部は、北・西・南の三方が空堀と塀によって区画され、東側の集落とは道や段丘崖によって区画される。館内部は常御殿・対屋・台所・会所等と想定される礎石建物が発掘調査で検出されており、会所南側（館の南西隅）には池を伴う庭園が配される。館西方の段丘崖に面した門前区画は遺構が希薄であり、広場等の使用が想定される。館東側山際の段丘上にまとまった集落が存在し、ほぼ同範囲が中世遺跡の範囲内である。

発掘調査によって拠点周辺は一三世紀後半には土地利用が始まったと想定され、館自体は一四世紀末から一六世紀初頭までの存続年代が想定される。また、館は一五世紀末から一六世紀初め（下館ⅡB期）に建て替えを行って最盛期を迎え、一六世紀中頃に廃絶して他所に移転したと想定している（飛驒市教育委員会二〇一〇）。

（三）山城の配置と構造

下館の東背後には高原諏訪城が控える。主要部は堀切や塹堀、切岸を多用し、各地区の連絡よりも防御を重視している様相が見える。主郭は帯曲輪が取り巻く櫓台状であり、虎口や石垣は確認できない。一方、主郭と堀切で区切られた南側地区は不明確ながら通路設定が読み取れる。この様相は傘松城跡と同じく江馬氏の山城の中では発展的な構造である（三好清超二〇二〇）。麓の集落との位置関係を見ると、山城主要部は館の直上ではなく、集落南端に位置する。一方、館直上にも城郭遺構が存在するが小規模かつ単純な構造である。下館の廃絶後も、高原諏訪城は天正一〇年（一五八二）まで存続していたことが文献で確認できる（寿楽寺蔵大般若経奥書）。高原諏訪城に石垣やこの下館との時期差について中井均は、東町城に拠

点が移ったという見解の中で、高原諏訪城については、①維持管理継続説・②廃城説（文献上の諏訪城は別の城という理解）・③一時廃絶後再利用説を挙げ、このうち維持管理継続説を推して、東町城への一元化の過程の中で捉えている（中井均二〇二〇）。

（四）地域内の寺社

近世段階では、下館東側に展開する集落の四至に白山宮・加茂宮・天神宮・諏訪宮といった神社が存在していた。さらに集落内部には江馬氏との関連が伝わる禅宗寺院の圓城寺・瑞岸寺が所在する。また、高原諏訪城から和佐保川を挟んだ対岸の山腹には江馬氏関連の山寺（殿坂口遺跡）が存在したと推定される。

（五）下館周辺の村落のあり方

周辺部の試掘確認調査の結果によって、下館の成立にもなつて人々が集住し、周辺の集落が形成されたと想定している（飛驒市教育委員会二〇二〇）。近世以降も遺跡と同範囲に集落が存在することから、下館の廃絶以降も周辺の集落は存続したと想定される。その位置は氾濫原を避けた段丘上かつ上宝道を押さえる場所にあり、神社や山城に囲まれた範囲が江馬氏の本拠地域として想定できる。

（六）まとめ（下館・高原諏訪城周辺の景観）

下館の段階では、江馬氏は基本的に氾濫原を避けた居住に有利な河岸段丘上を基軸とし、もともと存在した集落を再構成する形で拠点を形成したと想定される。また、館は近くを通る上宝道の管理を意識した館の配置となっている。さらに館と山城の間の段丘に沿って集落が存在し、その間を縫うように集落内の道が通行する。集落の端には寺社が配置され、まとまりのある拠点集落が形成されていた様相が分かる。しかし、街道を中心とした町場の展開や館を中心

とする武家屋敷群の集住等の発展的な様相は確認できない。山城（高原諏訪城）の配置も館と必ずしも一致しないことから必ずしも同時期に一体として利用されていなかった可能性が考えられる。

これまでの調査から、村落や寺社の形成が館の利用開始と関連していると想定され、地籍図が作成された明治期に至っても空間構造の変化が少ないことが分かる。一四世紀段階に形成された拠点集落のあり方がその後も引き継がれた可能性が想定できる。

四 江馬氏との関連が想定される山寺跡（殿坂口遺跡）

（一）山寺跡発見の経緯

本遺跡は、二〇〇一年に遺物が採集されたことにより、初めて遺跡の可能性が指摘された。場所が飛驒市神岡町殿字坂口の一角にある。高原川と支流・和佐保川の合流点付近の河岸段丘上、国道四七一号から約三〇mの比高差がある。そこから山稜八〇m北側の尾根上に岩ヶ平城跡が所在する。長く同一遺跡とされていたが、山寺跡部分は遺跡詳細分布調査の際に「殿坂口遺跡」として整理した。さらに筆者は遺跡の分析を進め、山寺の構造や歴史地理的な視点から検討を行った（大下永二〇二〇a）。

（二）遺跡の立地

遺跡は和佐保川を挟んで北岸に江馬氏の本城と伝わる高原諏訪城跡が存在するため、江馬氏との関連が想定される。また、遺跡の西側段丘下には主要街道である越中東街道と有峰街道とを結ぶ上宝道が通っている。更に和佐保川北岸には越中・有峰まで続く山之村道が通り、北西段丘下の和佐保川北岸には上宝道・山之村道や古川・高山方面に続く脇街道の分岐点を間近に望んでおり、交通の要所に

位置している。

(三) 地元伝わる山寺伝承

本遺跡に関する中世以前の記録は確認できないが、明治三年（一八七〇）結城梓著の『殿村後風土記』（神岡町一九八〇）には「山寺之古跡」という伝承地の記述が確認できる。この記述は、近世末期から明治初期ごろの殿坂口遺跡の様子を詳しく記録したもので、立地環境に関する記載は現状ともほぼ一致する。また、上壇に位置する本坊・屋敷跡伝承地の「山寺」と、末寺・坊舎伝承地の「下モ坊」の存在を伝えている。山寺は宗派・寺号・寺院名が不明で、現地には石の蓮台座や石の水鉢が存在し、裏の山根に神名不明の社と五輪塔の石が多く存在していると伝えている。関連し、大正初期ごろに作成された『殿村加茂若宮神社明細帳』（神岡町一九八〇）には、下館付近に所在する加茂若宮神社の境内社として「山神社 祭神 大山祇神」が確認できる。その由緒として「字山寺」の地にあった天台宗寺院の鎮護山神で、天正一〇年（一五八二）の諏訪城の落城時には既に荒廃して神社のみ残っていたという古老の口伝を伝えている。この記録から、遺跡内に存在した社が明治末までに加茂若宮神社に合祀されたことが分かる。このように、地元では、近年まで山寺という伝承が伝わっていたようである。

その他にも、天保一五年（一八四四）に作成された『殿村御山内取調箇所附帳』には、「岩ヶ平山」「小字山寺」「小字下モ方」といった地名が確認できる（神岡町一九七六）。少なくとも近世後期には、この付近が「山寺」と呼称され、山寺跡と伝わっていたと推測される。近世にはすでに寺社が存在したという記録は見えないため、伝承通りの山寺跡とすると中世に遡る可能性が想定された。

(四) 山寺の構造（図2・3）

地籍図や、現地調査を行って作成した遺構配置図から推定した遺跡の分析結果（大下永二〇二〇a）から、遺跡内の各場所の空間構造を整理したい。

山寺の中心施設

遺跡は岩ヶ平山の尾根及び山腹の河岸段丘上に位置する。国道から一段高い段丘に登ると、長大な平坦地に出る。すると一〇〜二〇cm程度盛土された幅約二mの直線通路につながる。通路を通過して中心となる平坦地を過ぎると、山際に一段高い二面の土壇が現れる。

土壇の一つは東西約一七m・南北三二mの規模があり、西側斜面は方形を意識して直線となっている。平面的な規模が大きく奥側に位置しているため、山寺として最も大切にされた場の可能性がある。周辺には川原石が点在しているため、礎石建物が存在した可能性がある。また、土壇斜面にも並んでいるような石材が確認できるため、土壇中心部の斜面は石積みが存在したと想定される。

中心施設への通路沿いに広がる平坦地

直線通路沿いには南北に方形区画が展開している。この区画には、所々に扁平な川原石が認められる。耕作の為に端に移動されたものと考えられるが、元々礎石として使用されていた可能性がある。この平坦地の南側から続く尾根には平坦地群が存在し、そこから岩ヶ平城跡へ至る山道が続いている。

北東の奥まった区画の墓域推定地

中枢から尾根の稜線を挟んだ北東側の山腹にも半円形の巨大な平坦地が広がる。ここからは和佐保川を望むことができる。対岸には高原諏訪城を見上げ、越中方面につながる山之村道を見下ろしてい

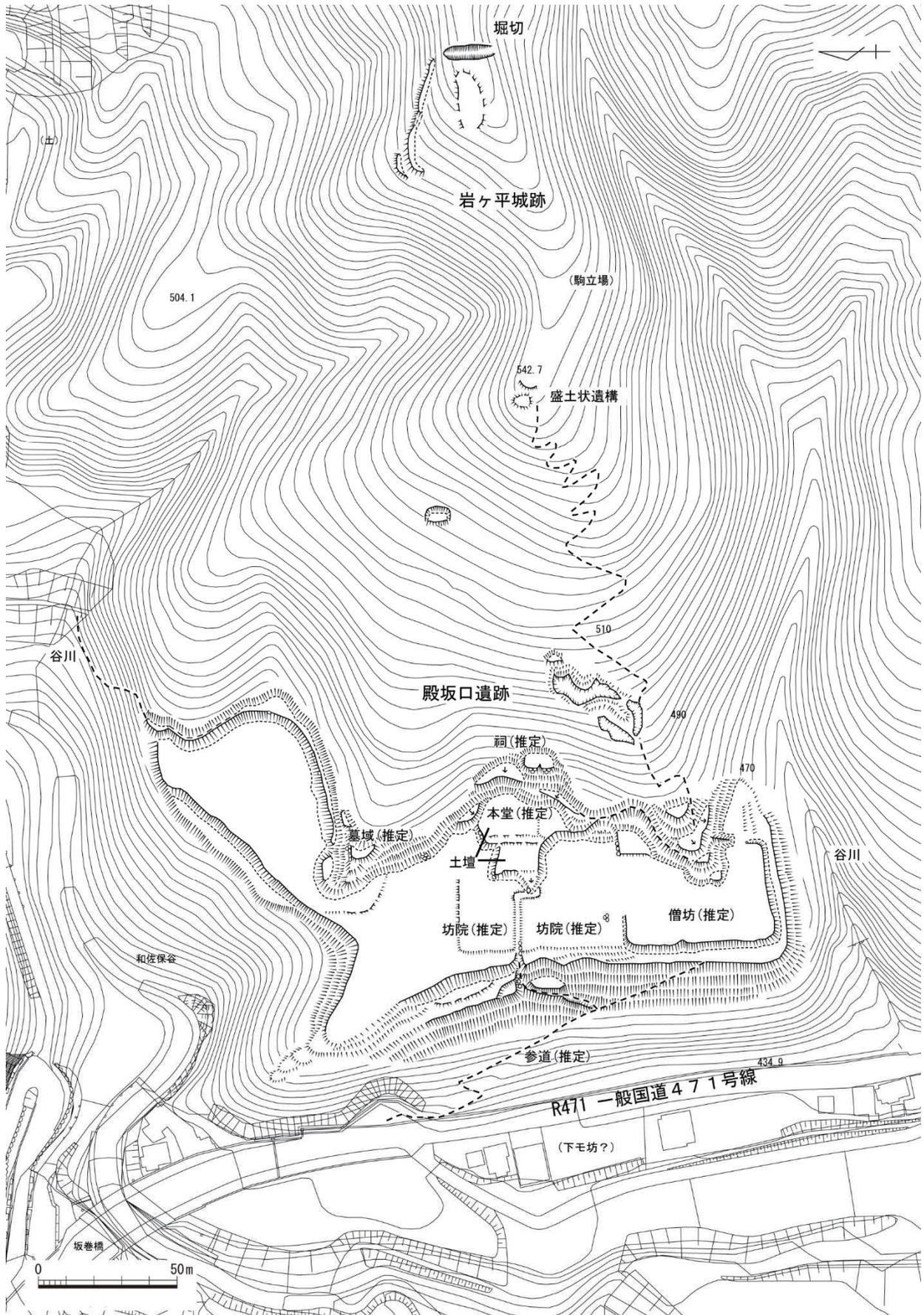


图2 山寺跡（殿坂口遺跡）遺構配置図

る。全体的に北面し、日当たりが悪い。この平坦地と中心施設との境付近の尾根には小平坦地群がある。その周辺には集石が点在し、斜面には部分的に石積みが認められる。過去の調査で五輪塔があったとされたため、その基礎の集石の可能性が考えられる。

地籍図による検討

続いて地籍図をもとに分析する(図3)。殿坂口遺跡は現在も一部が耕作地として利用されており、地表部は明治期以降の土地利用の影響を受けていると考えられるが、全体的な地形の状況は地籍図の様相と一致する。字坂口に位置する中枢地区と北東地区は大半が畑地であり、東側の山際に字岩ヶ平と接する。畑地は遺構配置図で区分した場所ごとに観察すると概ね2〜3区画に分割され、段丘縁辺部にある坊院の推定地は上部の畑地と合わせた地割となっている。北東地区から中枢地区にかけての山際や段丘崖には細長い芝地が取り巻いており、南部の僧坊推定地も西・南・東側にかけて細長いコの字状の山林が存在する。これらは現在も通路状の細長い平坦地や斜面上の小規模な平坦地として認められる。南側尾根付近には墓地が存在し、現状も同様である。字岩ヶ平は大半が山林であるが、字坂口の境界付近に一部芝地が認められる。山際は地表面観察で小規模な平坦地が確認できるため、その状況を示している。また、西側の字坂口に接する部分の山林は細かく割地されている。これは殿坂口遺跡の利用状況が山林部分まで影響しているものと考えられる。

特徴的なのは道のあり方である。麓の下モ坊伝承地から段丘崖をつづら折れに登り、段丘面直下で屈曲し、段丘面に至ると東西方向のやや斜めの直線通路となり、L字の芝地付近でクランクして中心部を貫通して南側の山際へと続く。これらの道の様相は地表面観察

の状況とほぼ符号し、もともとの山寺の参道を廃絶後も継続的に使用した状況が読み取れる。ただし、現在は東側尾根上の岩ヶ平城跡方面の山道や、段丘崖の途中から分岐して南側の僧坊推定地下部の通路状の平坦地に取り付く道が存在する。しかし、地籍図では認められないため、これらの道は比較的新しいものと考えられる。

下モ坊推定地の西側段丘面は和佐保川の岸に宅地2筆と墓地1筆認められる他は、主に耕地として利用されている。殿坂口遺跡に登る道の南北に存在する畑地の区割りは、上段と同じく方形が意識されており、山寺に関連した院坊や屋敷等の施設の存在が推定できる。殿坂口遺跡に登る道は段丘崖の間際で大きく屈曲し、段丘面中部付近で二股に分かれて高原川沿いを南北に通過する上宝道にそれぞれ合流している。道のあり方は寺院中心部までの明確な通路設定と共に、主要街道との接続を意識した構造となっている。また、道の周辺に展開する平坦地の区画は、上段と寺院中枢部のあり方と一致する。更に周辺に目を向けると、殿坂口遺跡の和佐保川を挟んで対岸には山之村道が通り、北東側の対岸付近で上宝道と古川・高山方面への道に合流している。和佐保川は潜入蛇行しながら高原川に合流しており、川の各カーブ付近には段丘面が形成され、明治期にも川沿いの段丘面を利用した耕地が点在している。

以上のような地籍図の検討から、当遺跡の明治期の様相は現在と大きな変化は無く、遺跡の残存状況は非常に良好であることが確認できる。西側下段の下モ坊推定地は開発によって現状は遺跡としての確認はできない。しかし、地籍図からは川沿いに上宝道が通る様相や、街道への接続を意識した寺院の参道とその周辺に展開する関連施設の存在が想定できる。

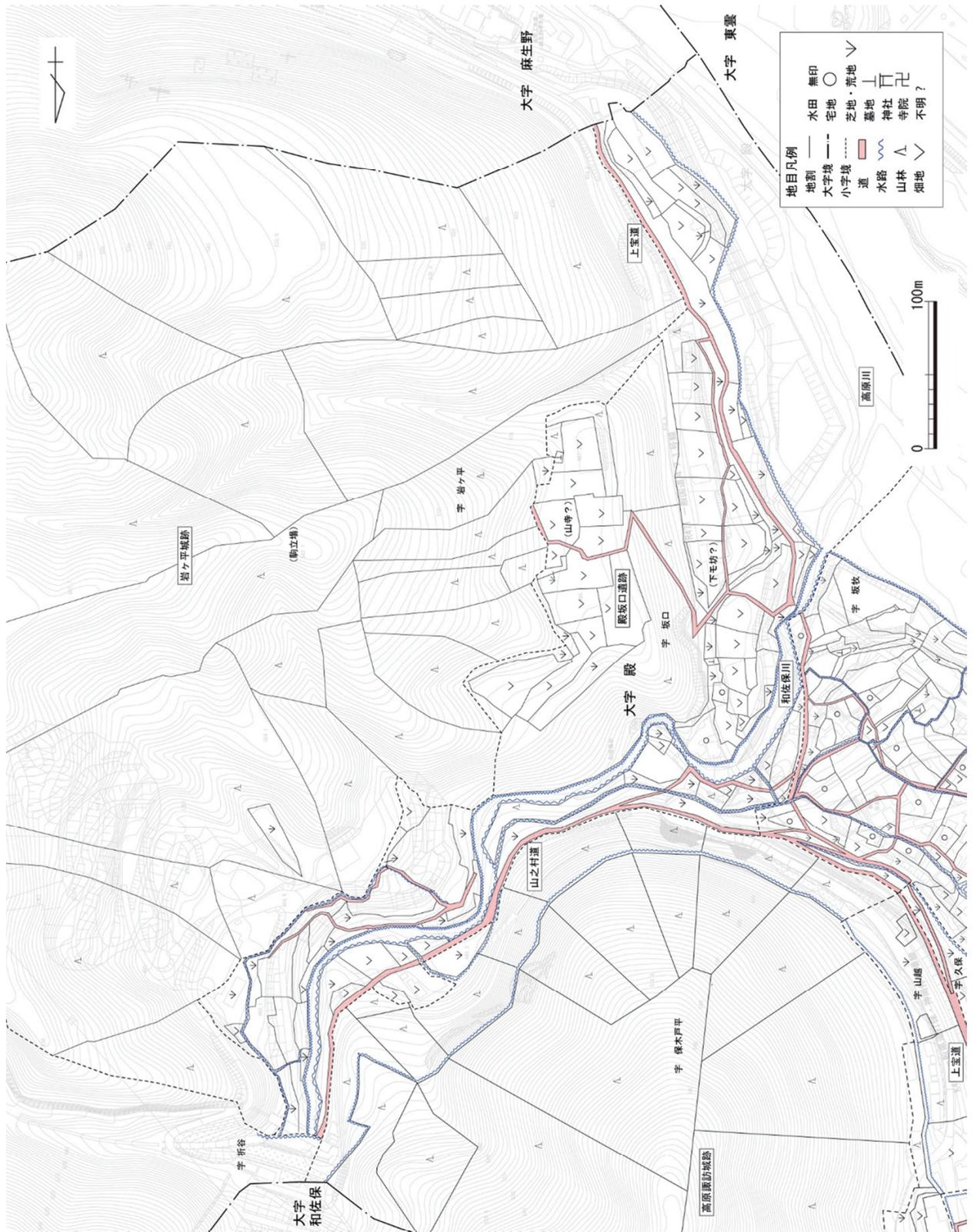


图3 山寺跡（殿坂口遺跡）地籍集合図

(五) 想定される遺跡の変遷

他遺跡との比較検討

これまでの研究によつて、飛驒地域の山寺には、寺院としての機能の他、神社信仰の場や墓域の設定、池の存在、石積みの使用、参道と通路設定があることなどが分かっている(大下永二〇一八)。本遺跡についても、そのような諸要素と比較したい。

まず殿坂口遺跡の平坦地同士にレベル差が殆どない。一段の平坦地に山寺としての諸機能を集中させて中枢をなしていたようである。最も奥まった場所は、中心となる土壇の背後かつ上段に位置するため、祠等の神社信仰の場であった可能性が高い。

また、墓域も設定されている。北東の奥まった区画に集石遺構が集中し、五輪塔が存在した記録も残るため、この付近は中世墓等の可能性がある。

石積みは、中枢となる土壇の斜面等に使用が認められる。高原諏訪城など江馬氏の山城に使用されていない石積みが山寺に使用されている事実は特筆される。

参道と通路設定も明確に読み取れる。麓から寺院中心部に至る参道は、地形に則した山道である。明確に山門は確認できないものの、土壇に向かって直線通路を志向したものとなっている。また、北東の区画では谷川まで通じる山際の通路状の平坦地も認められる。浄水を運搬する通路設定が想定される。

復元される中世山寺の姿

これらの平坦地はどのように使われたのか推測したい。まず、土壇は最上段の奥まった場所に位置する。麓から参道が直結する最も中心的な場所であり、本堂等の施設が想定される。偏平な川原石が

周辺に点在することから、建物は礎石建ちであった可能性がある。その上段の平坦地は石積みで護岸され、正面に出入り口を設けている。丁寧な造成や精緻な構造から、神社信仰の場であったと推定される。

土壇に至る参道の両脇の平坦地は、土壇正面にあたる位置から、重要性が高い地区と考えられる。礎石状の河原石も点在することから、寺院の中枢に近い性格を帯びた坊院群の一部である可能性が高い。その南側の区画は、整然とした方形プランを持つ。また、この付近では青磁碗・天目茶碗などの遺物が過去に採集されている(三好清超二〇一六)ことや南側の谷の水場に近いことから、より生活の色彩が強い僧坊等の施設が想定される。

奥まった北東側にも平坦地が広がる。墓域を挟んで中心の地区とは区画されている。高原川支流の和佐保川を望み、谷川を挟んだ対向には高原諏訪城跡と越中方面に続く山之村道が存在する。この北東側の区画からは和佐保川へ下る道も確認できる。機能としては、寺院を営む人々の耕地、高原諏訪城と対になった街道の監視場、別の勢力の場など幾つかの可能性が想定される。

このように、平坦地には、山寺に相応しい仏堂・本堂・神社・僧房等の施設が立ち並んでいたものと考えられ、採取遺物から想定される存続時期は江馬氏下館と同時期であった可能性も想定される。

想定される岩ヶ平城の使用年代

山寺の尾根続きには山城・岩ヶ平城跡が立地する。山寺からの比高差は七〇mほどである。尾根筋が西に向かって分岐する地形で麓の集落・街道を見渡すことができる。重要な立地にあるが、城郭遺構自体は単純な構造である。尾根の先端には盛土の遺構が認められ

る。東側尾根沿いになだらかな平坦な場所があり、この平坦地の東側背後の尾根上に堀切が設けられている。堀切は南側に向かって堅堀状となっている。尾根伝いに来襲する敵に備えつつ北西部で合流する主要な街道を監視し、下館や高原諏訪城を中心とする江馬氏本拠との連絡を意識したものと想定される。

また、常住性が低いであろう構造からは、政治的緊張が高まった段階に臨時的に使用された山城と考えられる。このため、山寺廃絶後に、その構造を継承しつつ、山城に転用した可能性がある。

山寺の廃絶と山城の構築

山寺の年代は、採集遺物から一三世紀後半から一五世紀前半ごろと推定される(三好清超二〇一六)。発掘調査から推定される江馬氏下館の存続年代が一三世紀後半から一六世紀前葉であるため、殿坂口遺跡に存在した山寺と江馬氏の下館は同時期に営まれつつ約一世紀早く山寺が廃絶したと考えられる。この山寺は山地に立地するという点で密教系の寺院であった可能性が高いと考えられるが、一五世紀前半に飛騨地域では密教系寺院の活動が衰微していく傾向が史料に見え(大下永二〇一八)、それと一致していると言える。

この山寺とは違う時期に岩ヶ平城が利用されたと考えられる。岩ヶ平城は江馬氏下館から直接視認できない越中方面の山之村道を押さえ、上宝道・山之村道や古川・高山方面に続く脇街道の分岐点を押さえる極めて重要な地点に立地している。山城としては単純な構造から、緊張が高まった一五世紀後半以降から江馬氏が滅亡する一六世紀後半までのいずれかの時期に、高原諏訪城に付随する山城として江馬氏によって使用されたと想定される。

五 東町城周辺の空間構造(図4)

(一) 遺跡の立地と街道のあり方

東町城周辺はこの地域を流れる主流・高原川と支流の吉田川・山田川が合流する地点にある。高原川流域は全体的に岸との標高差が大きく、断崖絶壁の難所が多い。その中であって東町城が所在する船津・東町付近は高低差が少なく、比較的平野が広い地域のため町場形成に適した地形と言える。この地域の遺跡は河岸段丘上に縄文時代の散布地が分布するが、段丘下の町場には確認できない。そのため、長い期間集落としては使用されず、東町城の築城と前後して町場が形成された可能性が高いと言える。

河川とともに街道の結節点も複数存在する。第一に、高山と越中方面を結ぶ主要街道である越中街道が挙げられる。この地域では高原川右岸を通る越中東街道と、左岸を通る越中中街道が通行するが、このうち越中東街道は東町城直下にある藤橋で左岸に渡河する。藤橋を渡る直前に東町城へ至る城道と信州方面の脇街道である上宝道に分岐して右岸の段丘上へ続いている。左岸側に渡ると、藤橋の袂で道がさらに二股に別れ、南側は吉田街道へ続き、北側は越中東街道として町場に続いている。越中東街道は下流に進みながら段丘崖下を屈曲して通行し、山田川上流の高山方面に続く。一方、越中方面から左岸を通る越中中街道は、山田川を渡って船津の町場に至り、町場内で越中東街道に吸収される。

(二) 東町城の配置と構造

東町城は江馬氏によって築かれ、後に金森氏が入城したと伝わる。段丘崖に面して本丸櫓台が存在し、コの字状に曲輪と空堀を巡らしている。現在の城跡の曲輪や堀の配置は最終段階の様相を色濃く

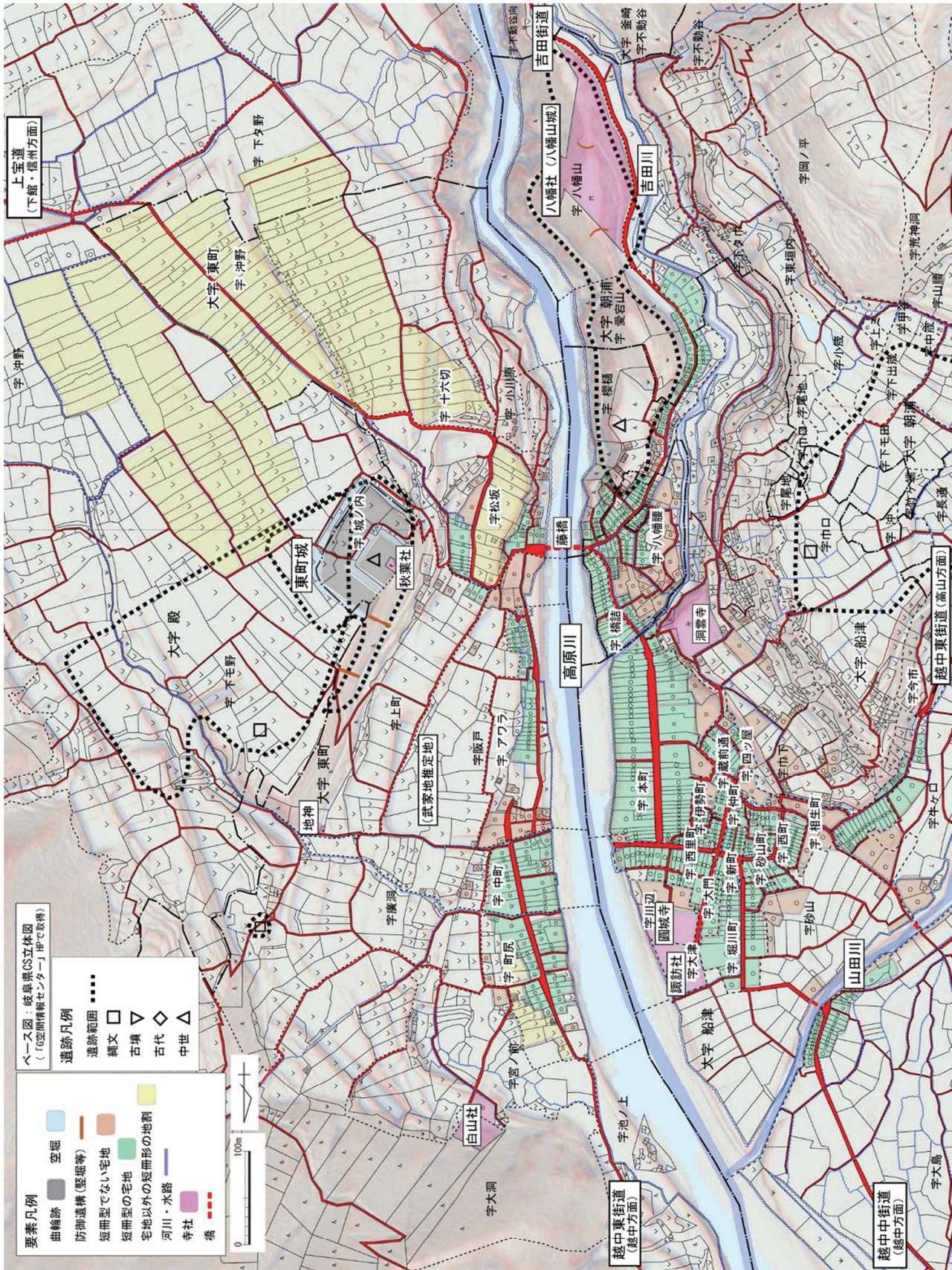


図4 東町城周辺景観復原図

残している。昭和の公園整備によって石垣は積み直され、遺構にも大きな影響を及ぼしたと考えられるが、整備前の図面や古写真（図5）を確認すると、曲輪の形は資料館整備前と大きく変わっていないことが確認できる。江戸時代に描かれた「越中東街道画卷」（洞雲寺蔵）には東町城付近に「江馬出張」として記載が見える。絵図には石垣をとまなう櫓台のほか、堀跡と見られる切れ込みも描かれている。また、一九六〇年代に撮影された現地の古写真を確認すると、堀の痕跡が認められる。さらに現在天守がある場所には、算木積みを伴う石垣が築かれていたことが確認できる（図6）。そのため、この場所には石垣を基底とする櫓が建っていたと想定される。古写真に見えるような算木積みを伴う石垣は他の江馬氏の城には見られないものであり、その構造から金森氏の改修の可能性が想定されている（佐伯哲也二〇〇六）。また、この櫓台は段丘に面して構築されていることから、下方の町場から遠望できる象徴的な役割を果たしていたと考えられる。そのため、城郭と城下町の一体的な整備が想定される。

一方、江馬氏段階の様相が推定される遺構も発見されている。資料館東側の住宅建設に伴い二〇一八年に実施した立会調査では、柱穴・堀などの遺構が発見された（飛騨市教育委員会二〇一八c）。調査地区は内堀と外堀で囲われた一般的に言う二ノ丸にあたり、建物は掘立柱であることが確認された。この掘立柱建物跡を構成する柱穴の状況は、江馬氏下館堀外地区の状況と近似している。またこの調査では、堀跡と想定される五m幅の溝状の遺構を確認した。これまで字絵図等から想定していた金森氏時代の堀とは位置が合わ



図5 古写真（公園整備前の東町城跡、個人蔵）



図6 古写真（東町城跡櫓台石垣、個人蔵）

ないため（図7）、最終段階より前の時期の堀跡と想定される。発見した遺構は、一六世紀初頭の江馬氏下館廃絶から江馬氏が滅びる一六世紀後半までの江馬氏拠点のあり方の手がかりとなるもので、東町城が江馬氏最後の拠点であり、その後には金森氏が改修して再利用した可能性が高まったと言える。

（三）東町城下町の街区構造（街道に沿いの町人地）

地籍図を用いて東町城の周辺の景観を復原を行うと（図4）、様々なことが推測できる。東町城が見下す町場は、複雑に接続する河川・街道を中心に街区が展開している。東町城と同一段丘面上に

は、街道に沿って短冊型地割によつて構成される街区が展開する。これらの街区は段丘崖の方位を軸とする東町城とは軸線が不一致である。

高原川沿いの町場は、城に面した段丘ではなく、河川・街道に沿って展開する。右岸・東町の町場は、城の直下を通る越中東街道沿いに形成される。「町尻」「中町」付近では街道に沿った短冊型地割で構成される長方形街区が道の両側に見える。「アワラ」付近で段丘が張り出すため、街道も屈曲して川沿いを通る。屈曲地点はブロック型地割であり、そこから南側は街道の片側のみ短冊型地割が続き、藤橋の袂付近はブロック型地割となる。

左岸・船津の町場も街道に沿って展開する。越中東街道沿いの「本町」は道の両側に短冊型地割で構成された長方形街区が展開し、



図7 東町城跡の調査で検出した堀の位置図
(飛騨市教育委員会 2018c より)

北に位置する「西里町」まで続く。西里町は川とタテ方向の街区であるが、南側は本町の街区が優先され、本町から外れる西側は道の両側に短冊型地割が見える。西に進み「新町」「砂山町」付近で越中東街道と越中中街道に分岐する。中街道沿いの「堀川町」は一部範囲に短冊型地割が見え、町の北端で屈曲して山田川を渡河する。東街道沿いの「砂山町」「西町」「相生町」は段丘崖下の街道沿いに短冊型地割の宅地が見え、場所によってブロック型となる。船津地区内は脇道が複数巡っており、非常に複雑な構造である。地割の切合い関係は本町が第一であり、次に西里町、その次に他の街道沿い街区がある。基本的に東街道の街区が中街道より優先される傾向があり、特に本町筋は東町城の正面に位置し、かつ主要街道の一部であることから、第一に優先した可能性が想定できる。

(四) 城下町内部の神社

この地域内の神社について、東町では集落境界付近に神社が存在し、船津では主要街区を押さえるように神社が存在する。特に船津については本町の南端段丘上に洞雲寺が、堀川町の東側川沿いに圓城寺と諏訪社が存在し、いずれも江馬氏関連の伝承を持つ。禅宗寺院を基本とする点は、真宗勢力を町場に取り込む意識が読み取れる高山・古川盆地の拠点とは相違する要素である。高原川流域は江馬氏下館周辺をはじめとして、全般的に禅宗寺院が多く分布する。そのため宗教勢力の構成や配置については、江馬氏段階の様相に影響を受けた可能性が考えられる。

さらに圓城寺西側の「大門」から洞雲寺に向かって「仲町」が通り、街路に沿った短冊型地割が一部確認できる。神社も主に本町を押さえるように配置されていることから、東町城下の整備にあつ

て街道の再設定を行い、さらに船津における基本街区として本町の街区が第一に形成されたと推測できる。

(五) 東町城下の「そら町」(武家屋敷推定地区)

東町城と町場の間の低位段丘上(「上町」「阪戸」付近)は耕地が中心であり、ブロック型の地割が多く見える。この付近は古くは「そら町」と呼ばれたと伝わる(ふるさと神岡を語る会二〇〇〇)。地名の由来は上段に位置する地区であるためと伝わるが、高山にも「空町」という地区が存在する。高山の空町は、高山藩段階では武家屋敷地であったものが、一七世紀後半に幕府直轄地となった後は耕地に変化したという経緯がある。さらに高山における空町(武家屋敷地)は城郭と町人地の間に位置し、これは増島(古川)においても確認できる飛驒の金森氏城下町の定型的要素である。東町城下についても低位段丘上の耕地を武家屋敷地と仮定すると、同様の構造が読み取れる。このため、東町城下の「そら町」についても、東町城に付随する武家屋敷地であったものが「空」になったという可能性は想定できないだろうか。

(六) まとめ(東町城周辺の景観)

東町城と同一段丘上の短冊型地割で構成された街区は、最終段階の城郭と異なる軸線で展開し、氾濫原を避けた好立地の場である。また、東町城周辺における発掘調査成果や街道・河川を押さえた立地から高原川沿いの地区も含めて、江馬氏段階の利用が想定される。一方、東町城下・高原川沿いの船津・東町の町場については、地籍図の検討から城郭と城下町が一体化した構造や、街道を町人町に取り込むあり方、さらに町人地が長方形街区と短冊形地割で構成される様相が読み取れる。これらは織豊期以降の城下町の特徴(前川要

一九九一)が想定できる。船津の町は、明治の大火で街区構造が大きく変化して現在は確認し難いが、明治前期の地籍図から景観復原を行うと、金森氏の城下町としての構造が浮かび上がってくる。

六 飛驒地域全体からみる江馬氏拠点の構造

以上、江馬氏の主要拠点として下館・高原諏訪城・東町城の他、関連する遺跡として山寺跡(殿坂口遺跡)・岩ヶ平城の様相を検討した。本節では、飛驒地域における武家拠点の形成過程の分析をもとに(大下永二〇二一 a・b・d・f)、下館・東町城周辺における村落・町場の構造と変遷を整理したい。

(一) 平野部における在地勢力段階の拠点構造

江馬氏下館や、飛驒国司・姉小路氏の拠点であった岡前館は、居住に有利な河岸段丘上に位置する。また、遺跡の分布によつて中世以前の人の営みが確認できることから、既存集落の構造を取り込んで再利用し、部分的に拡張したものと考えられる。さらに江馬氏下館の付近に上宝道が通るように、これらの拠点は付近に街道が存在する場合が多い。そのため、地域を通る街道を押さえようとした意識が読み取れる。寺社は拠点地域の周縁部に存在する場合が多く、江馬氏館における山寺の配置はその典型的な形と言える。

この段階における飛驒の武家拠点は、既存の集落のあり方からの変化が見えない。そのため、武家拠点形成にともなう家臣団屋敷群の配置や街道を取り込んだ町場の形成等、政治・経済活動の発展性が推定できない。拠点集落や街道を押さえ、寺社を周縁に配置するという当初からのあり方が引き継がれたものと想定される。

(二) 山城の使用と戦国時代後期の拠点移動

飛驒地方に点在する山城について確かな使用開始年代は不明だが、国内勢力の争いが表面化する一五世紀後半ごろには使用が開始されたと考えられる。一方、古川盆地の山城で確認できる畝状空堀群や堀切等の遺構の一部はその配置から盆地外からの敵の来襲に備えたものであり、一六世紀前半までに見られる盆地内部の争いではなく、その後の時代に国外からの脅威に備えて改修したものと考えられる。また、江馬氏の山城に畝状空堀群が見えないことは、特筆される事項である。江馬氏は、一五世紀後半以降に下館を改修するが、その構造は京都の上級武士の邸宅に類似する文化性の高いものであった。しかし前述の通り、拠点集落には発展性が見えないことから、武家拠点自体の形態変化に注力したものと想定される。その後、一六世紀前半には下館を廃し、高原諏訪城は継続使用しつつ、東町城に移転したものと想定される。より河川・街道の合流点に近い地域を新たな拠点と位置づけ、周辺に町場を設定した可能性が想定される。

(三) 金森氏城下町の形成（東町城下町）

天正一三年以降、金森氏によって飛驒各地に明確な都市プランに基づいたまちづくりが行われ、当地域では東町城が再利用されたと想定される。織豊武将である金森氏の城下町は、城郭と城下町の一体化・武家地と町人地の区分け・長方形街区と短冊型地割を志向する計画的街区設定を基本とし、近世城下町の構成要素が揃う明確な都市プランの施行が認められる。以前の検討から、飛驒における金森氏城下町は以下のような複数の定型要素が見える（大下永二〇二一 a、本稿では東町城の要素を加筆）。

① 主要河川と支流の合流点付近に立地

（高原川＋吉田川・山田川）

② 主要街道と脇街道の結節点に立地。

（越中東（中）街道＋上宝道・吉田街道）

③ 氾濫原や湿地等の居住に不向きな場所にも町場を設定。

（高原川沿いに船津・東町の町場が存在）

④ 中世以前の遺跡地でない場所にも町場を設定。

（町場内に中世以前の遺跡の分布無し）

⑤ 城下町の街区を押さえる位置に寺社を配置。

（本町を基軸に洞雲寺・圓城寺・諏訪社）

⑥ 城郭と町は一体であり、主要部は石垣等の改修を伴う。

（東町城＋城下町、石垣有）

⑦ 「城郭―武家地―町人地」という身分に応じて区分けされ、

段丘崖や用水路によって区画される。

（東町城―（そら町）―東町・船津、段丘崖で区分け）

⑧ 町人地の街路に主要街道や脇街道との結節点を設定する。

（越中東街道・越中中街道を町人地に設定）

これらの要素に加え、高山・増島といった拠点については、主要街道が通る町人地に一〇三の数詞を冠する三街区が確認できる（図 8）。東町城の城下町についても、町人地の三街区の構造は認められないが、その他の八種の構造は推定できる。東町城は江馬氏段階の利用が想定できる地域でもあるため、新規建造である高山・増島と違い、既存のあり方に影響を受けた可能性が想定できる。

金森氏城下町の特徴の一つに、立地的な環境が挙げられる。江馬氏下館や、姉小路氏の岡前館等の在地勢力段階の拠点は、自然堤防上や山際の河岸段丘上等、居住に適した立地環境を選定し、多くは

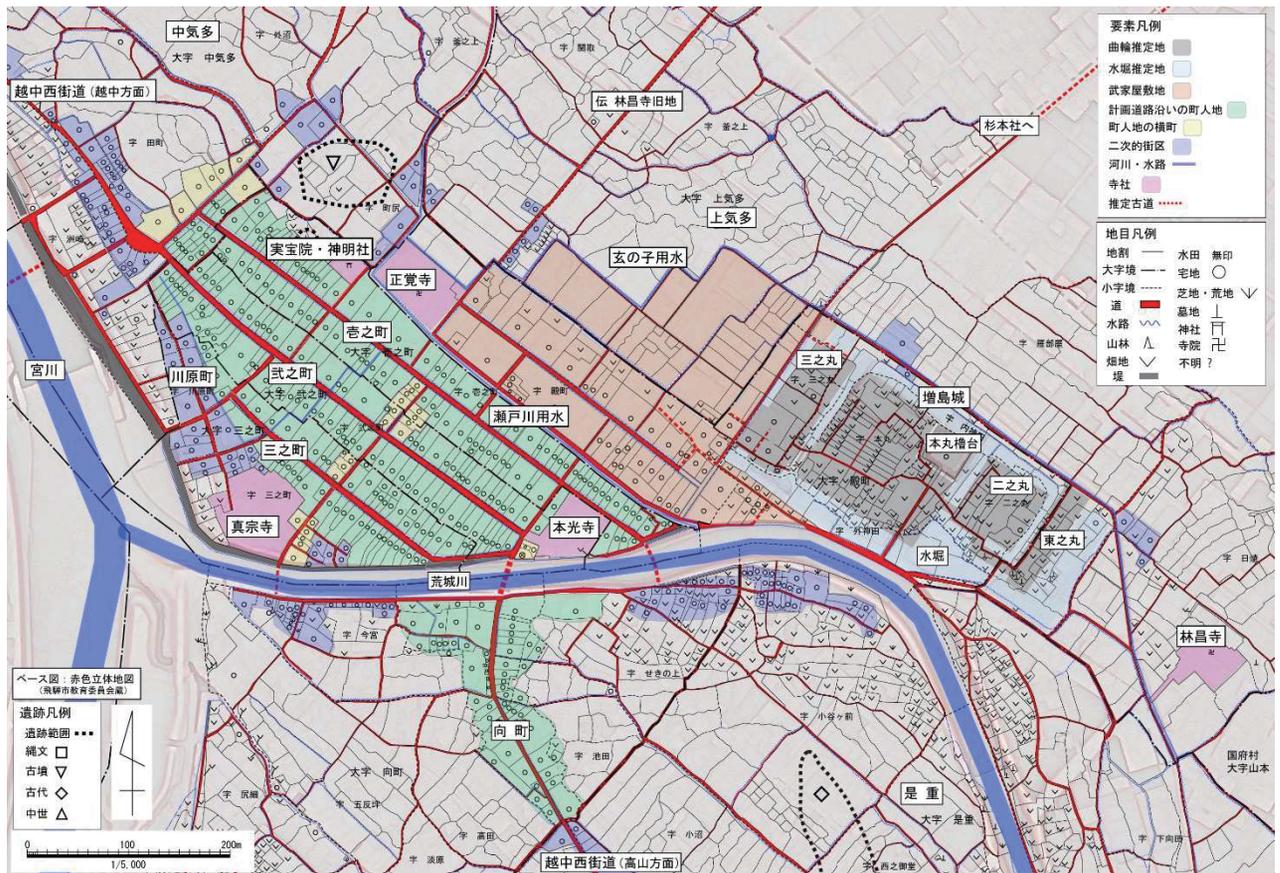


図8 増島城下町（飛驒古川）景観復原図

古代以前の遺跡地に根差した村落の形態を基本としている。一方、金森氏は河川の合流点や街道の結節点を取り込むことを重視し、水害が起こりやすい地域にも土木工事によって地形の克服を図った上で町場を建設している。その中でも、河川沿いに町人地を配置し、河川から比較的距離がある地区や段丘上などの災害時に有利な場所に武家地・城郭を配置することで明確に区分している。この構造は東町を含む飛驒国内のすべての金森氏城下町に共通している。

そのように見ていくと、東町城周辺は他の金森氏城下町と共通する特徴が多く見える。街道を集中的に管理するため藤橋に起点を設定し、そこから派生する各街道沿いに町人地が形成される。特に高原川兩岸に位置する主要街道沿いは、他の街区よりも優先される地割パターンが読み取れるため、当初の計画街区である可能性が想定できる。段丘崖で区画されたその上段に、武家地や東町城が位置する。このような主要街道を重視する構造や身分による区分けのあり方は他の金森氏城下町と同一であることから、東町・船津の町場は金森氏による城下町形成を推定できる。武家屋敷と想定される東町の「そら町」は、東町城が廃城になって武家が去ると、高山や増島と同じく耕地に変化したと想定される。一方、東町城周辺は江馬氏段階の土地利用も推定される。そうであれば江馬氏の最終段階の拠点を金森氏が改修したという伝承通りの可能性が指摘できる。

なお、飛驒高山藩の三代目藩主・金森重頼の代には、高原郷のうち約三千石が弟の重勝に内分地され、以後は左京家領となる（堀祥岳二〇一六）。東町城は一國一城令によって廃城になったと想定されるが、以後は増島や萩原のような旅館としての使用の記録は確認できない。一方、高原川左岸の釜崎地内に左京家の屋敷伝承地

(金森左京邸跡)が伝わるが、こちらも詳細は明らかではない(岐阜県教育委員会二〇〇五)。主要な町場として存続する東町城下に継続的に拠点を置く方が合理的と考えられるため、左京家領時代に東町の城郭部分を利用した可能性も想定すべきと考える。

七 江馬氏の領域支配のあり方と変遷

以上の内容をふまえ、本節ではまとめとして江馬氏の拠点地域・下高原郷全体の領域支配の様相を整理したい。

(一) 主要街道について

江馬氏城館跡の所在する下高原郷(現在の神岡町)一帯は、飛驒地域の最北端にあたり、越中・信濃と接していることから、古くより交通の要所であった(五一図9)。中世の鎌倉時代において、交通上最も重要であったのは鎌倉街道である。日本各地から、幕府のあった政治の中心地・鎌倉へ通じる鎌倉街道が整備された。飛驒山脈を越え、信濃・甲斐を抜けて鎌倉に至るルートは、飛驒地域はもちろんのこと北陸諸国からも最も近い。このため、飛驒の鎌倉街道は北陸諸国と鎌倉とを結ぶ道としても重要であった。この鎌倉街道の一つが越中から神岡を抜けて信濃に至る有峰街道である。室町時代以降、この街道は信濃街道あるいは信州街道と呼ばれるようになり、引き続き飛驒・北陸諸国と信濃を結ぶ道として機能していた。また、飛驒地域と越中を結ぶ越中街道も存在した。主要なもの越中東街道・越中中街道・越中西街道の三ルートであった。神岡には、これらの主要街道を連絡する幾つかの脇街道が通っていた。

江馬氏と関係がある山城は、神岡に出入りするための街道沿いやその分岐点などの重要な場所に立地する。江馬氏城館跡は居館跡の

下館と本城・高原諏訪城を中心として、さらには江馬氏の支配領域を取り囲むように配置された山城群が有機的に結びついていた。

(二) 中枢をなす居館・集落・山城・山寺等の変遷

山城群で守られた領域の中心に、江馬氏の下館とそれを包含する集落、本城、山寺が存在する。館の成立から廃絶まで、さらに移転から金森氏以降の変遷を一連の流れで推定したい。

人々が下館周辺に住み始めたのは一三世紀以降(I期)と想定される。館が成立した一四世紀末(II A期)には、館周辺にも集落が形成されていたと想定される。館に集住する人々が生活を営んでいたのだろう。その範囲は四至に神社を配置した近世以降の村落の範囲と重複する。一五世紀末から一六世紀初頭(II B期)には館の建て替えが行われた。飛驒国内の政情が不安定となるこのころには高原諏訪城をはじめとする山城が本格的に使用されはじめたと考えられる。この時期には山寺は廃絶し、その背後の尾根上に岩ヶ平城が築城されたと推測される。江馬氏拠点地域に所在した密教寺院が衰退した過程と、江馬氏に関わる政治的緊張を背景として山城の軍事的機能が増強された様相が推測できる。その後、一六世紀中ごろ(III期)には、館の機能を他所に移し江馬氏は東町城を新たな拠点として周辺に町場を設けた可能性が想定できる。

天正一〇年(一五八二)、八日町の戦いで江馬氏は三木氏に敗れ、その後数年のうちに領主としての姿を失い、高原諏訪城等の山城も廃城となったと想定される。天正一三年(一五八五)には金森氏が飛驒に侵攻し、神岡地域では東町城が再利用される。金森氏は石垣を含む東町城の改修を行い、麓に城下町を整備して拠点とした。下館周辺の調査で近世期の遺物が出土したことから、下館周辺の集落

は以後も存続したと考えられる。

(三) 江馬氏の領域支配の構造

江馬氏城館跡に関わる遺跡の調査から、飛驒北部をいかに支配していたかが見えてきた。すなわち、街道や河川への眺望がきく各所に山城を配置し、軍事・商業の面で重要な役割を果たした交通路を掌握した。その中枢区域は館・集落・城・山寺で成り立っており、その成立や廃絶と周辺の集落や山城、寺社の成立が連動している。このように、城館群等が有機的に結びつき、自身の領域を支配していた状況が浮かび上がる。

八 おわりに

本稿では、歴史地理的な手法によって江馬氏拠点地域の構造と変遷を検討した。飛驒地域に関する中世史料は少なく、発掘調査成果によって確認できる状況にも限界がある。そのような中でも、本稿のように地籍図を利用することで、中近世の景観を広い視点で推定することが可能となる。

江馬氏拠点地域における検討の結果、下館周辺においては、集落・寺社・街道・山城の配置関係から拠点地域全体の構造が推定できる。下館を中心とする江馬氏の拠点は寺社に囲まれた山際の段丘に集落が展開し、その一角に館を設置したと想定される。その後、一五世紀末から一六世紀には京都の武家文化を吸収し、庭園を持つ武家屋敷を形成したものと考えられる。また、拠点形成にあたって武家屋敷群の配置や町場の形成といった集権的な様相は認め難いことが想定された。さらに、近接する山寺（殿坂口遺跡）の検討からは、江馬氏拠点と関連した相当規模の中世山寺の存在が想定され、

飛驒地方における密教勢力の衰退とともに山上部に山城が築かれた変遷が推定できた。

一六世紀前半には江馬氏は下館から拠点を移したものと想定される。その候補地として挙げられるのが東町城周辺である。当該地域は交通の要衝であることから、江馬氏の政治的・経済的に下館周辺より有利と言える。江馬氏本拠が東町城に移転したのであれば、江馬氏は旧態依然とした拠点のあり方から脱却し、地域経済を活性化させようとした可能性が考えられる。

さらに東町城周辺の検討では、特に町場の街区構造から金森氏段階の城下町の構造が推定できた。飛驒国全体がそうであったように、高原郷においても金森氏が織豊権力の拠点形成のあり方をはじめて導入したと言えるだろう。東町城の城下町は、高山・増島を指標とする定型的要素（河川や街道の合流点という立地、城郭と町場の一体化、階層による配置関係、町人地内の主要街道等）を基本として、宗教勢力や前段階の町場利用といった、この地域独自の要素を加味して調整した様相が推定できる。

東町城の廃城後、本稿で武家屋敷地と推定した「そら町」一帯は耕地として利用され、船津・東町は川沿いに展開する町人地を主体とする在郷町として存続する。明治以降は街道沿いに町場が拡大し、船津大火による大幅な町の改造を経て、現在の神岡の中心市街地へと繋がっている。このように考えると、江馬氏から金森氏という武家の拠点形成の変遷が、現在の神岡のまちを形作ったと言える。神岡も元々は城下町であり、町の原点として江馬氏・金森氏といった武家が深く関わっていたことをより強く認識する必要がある。